洪允淑詩集『放牧時代』より　岸井紀子訳

手紙

長く暗い夜
私は一枚の手紙を書く

門は閉ざされ
星は沈黙し
花たちは南へ旅立って
空いた地に
風は空しく葡萄畑を守り
時は虚無の丘を下りて行ったが

私は終えることのできない
一枚の手紙を今夜書く

漆黒の闇の中
誰かが
荒野を歩いてくる
雲のような足跡

空のような目元に
秋の悲しみをたたえ

真紅の薔薇で
冷たい手を温める方がいる

道のない道
門のない門から
倒れた体たちを起こし

闇の中をお出でになり
沈黙のうちに
悲嘆を漬けて喜びを醸す
方がいる

私は今夜も
長く熱い手紙を書く
星を見るために夜を待ち
あの方に会うために
沈黙の中に旅立つ

私が帰る私の最後の住処
約束の地

光の港
沈黙の旅人
私の最後の同行者の方

私はその方に
今日も
長く熱い沈黙の手紙を書く

放牧時代

あの頃私の中には
いくつかの窓がゆらゆら揺れていた
明るくて暗い世の中に向かって
それぞれに灯りをつけ
危険な全身をあらわにしていた
どこからでも捉えられそうに照らし出していた
窓の中の明るい日差し
日差し中には熟れた苺畑の
真っ赤な苺が分別なく
にやにやくさむらで腐っていた
あの頃私の家は
まったく家のない窓だけの納屋
穴ぼこぼこの納屋だったから
無駄に目ばかり大きく首の長い子供は
この世の緑に目がくらみ
茨、野いばらの蔓に
やたらに刺さり
刺さって帰る夕暮れの道は
いつももやもや喉がつまる霧だった。
通りには四方に
＜通行禁止＞の杭が立てられていた

雪降る夕べ

雪降る夕べの道には
綿の花が散る匂いがする
お婆さんが昔綿を紡いだ
糸車の音がする
夜更けに広げた五色の風呂敷の中
カサカサ絹がしわになる音がして
梅に鶯、松に鶴、桐、桜
幼年の絵の切れ端何枚か
落ちる音もする

どこでそのたくさんの話を積んでくるのか
どこでその小さな音たちを解き放すのか

雪降る夕べの道には
雪を被った故郷の家の低い煙突塀の上に
ミソサザイがばたばた飛ぶ音
一疋の中国紬白く擦り切れ
母が辛い月日を越え
若き日にひとり越えた
五峰山の谷雪に埋もれた道

水墨で解き放す恨み五百年
朽ちた歳寒図がある

四〇年歩いても届かない国
雪降る夕べの道には
ふとその国遠い道を来てしまったような
明日か明後日には
その家の前に着くような
雪の中雪に埋もれた温かい平安
もう傷つくことのない
白髪の平安の眠りにつくようだ

洪允淑（ホン・ユンスク）
詩人。1925年平安北道（現、朝鮮民主主義人民共和国）出生。1947年「秋」で登壇。詩集『麗史詩集』『風車』『生きる法』『京義線普通列車』など著書多数。1985年に大韓民国文化芸術賞を受賞。